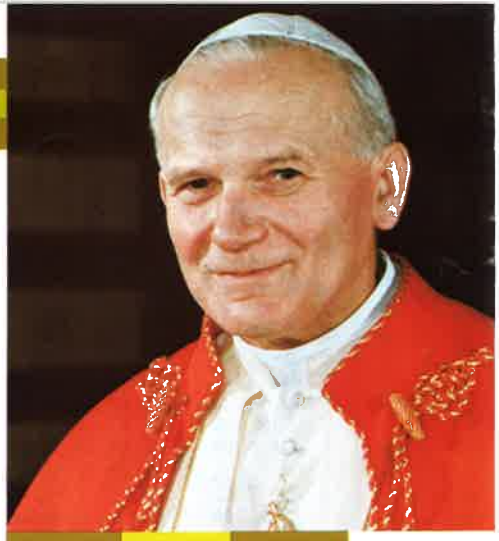
12 平成6年（1994年） 12月10日 教皇様の声（昭和59年10月1日第三種郵便物認可）
DECEMBER,1994 毎月10日発行 第176号



教皇様の声

〈待降節第一主日〉

新しい天と地の約束

（待降節第一日曜日、教皇様は古いローマのトラステベレ地区にあるアシジの聖フランシスコ教区を訪れて、お話をされた。）

■「こういうことが起り始めたら、身を立てて頭を上げよ。あなたたちの救いは近づいたのだから…。」（ルカ21・28）

（…）兄弟姉妹の皆さん、今回司牧訪問のため皆さんの所をお訪ねする幸いを得たわけですが、本日はちょうど典礼暦年で待降節の始まりに当っています。

待降節という言葉は、キリスト信者の心に親しくひびきます。待ち受ける私たちの前に繰り広げられるのは意味深い現実、イエズスの誕生のみならず、主の再来を告げる宣言です。世の終りの贖い主の再来。現代の歴史の中へ、繰り返し起る神の子・救い主の再来。主は来られた、主は来られる。

「勢力と大いなる栄光を帯びて」（ルカ21・27）やがてまた来られる。私たちは主を待つ、喜びと希望にあふれて。主は「栄光のうちに私たちを呼び寄せ、天の国をお与えになる」（集祷文）から。

■ 待降節の秘義を告げる神のメッセージが、今日私たちの間に響き渡ります。それを聞く私たちは、ヨセフとマリアの示した信仰と喜び仕える模範に励まされ、またキリストの謙遜と献身のお手本に支えられます。

見捨てられ、荒れ果てた町エルサレムから、預言者エレミアはバビロンに流された人々に、神の約束が必ず成就することを告げます。救い主・贖い主がおいでになること、「彼はこの地に公正と正義を行う。…ユダは救われ、エルサレムは安らかに住まわれる」（エレミア33・15～16）ことを。

しかしそれは試練を受けずには成就されない慰めの約束です。世の終りに主が来られる時には、天には混乱が、おののく地の民には苦悩があるでしょう。

福音史家は昔の預言的・終末論的な文体や表現にしたがって、大異変のありさまを描き出し、世界の清めと裁きが必要であると訴えました。同時に、新しい天と新しい大地が現れ、神の勝利があらゆる悪の力を打ち負かすことを宣言しています。万物の混乱と人心の不安は、人の子が現れる前触れであると語られます。

「身を立てて頭を上げよ。あなたたちの救いは、近づいたのだから。」 待降節の間、求められるのは信頼と注意深さです。特に祈る時の注意深さによって、私たちは全てを裁く神のみ前に出るのにふさわしい者となります。主は「とがのない聖徳のうちに（私たちの）心を固め」（Ⅰテサロニケ3・13）ることをお望みだからです。

■ おいでになる主への信仰を不動のものとし、主がいつも歴史の中におられ、世の終りに到来されるという確信を強めた私たちは、使徒の言葉を喜んで受け入れます。

聖パウロは私たちがただ成長するだけでなく、愛にあふれているよう主に願っています。この愛が互いの間で、共同体の中で、全ての者に、すなわち信者にも、信者でない人にも広がっていくよう願っているのです。

親愛なる皆さん、心が暴飲暴食や飲み物の酔い、生活の煩いで鈍らぬように（ルカ21・34参照）しましょう。キリストの来られる時、私たちが信仰を離れ、キリストの言葉と教えに無関心であってはなりません。救いの敵が勝ち誇ることのありませんように。主に依り頼む者が恥を受けることはないのですから。（入祭の歌）

■ ここにお集まりの信者のみなさん、待降節が改心と、注意深い心と、祈りへの専心と、神の言葉への注目という豊かな実りをもたらしますように。本日の典礼が願うように、主が道をお教えになり、真理によって導き、主を求め、恐れる人々にご自身を示し、その契約を示してくださいますように。（詩篇24番参照）（…）

信仰から遠ざかった人々を対象に要理教育を行い、注意を引きつけなければなりません。あらゆる機会を通じて全ての人に、十字架に付けられたキリストの比類のない愛を経験させてあげなければなりません。（…）

（九一・十二・一）

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
© 1994
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

もうご購読手続きはおすみですか？
「教皇様の声」
95年度年間講読者募集中！
年間購読1部900円、送料700円
バックナンバー1部80円
■お申し込みは精道教育促進協会
郵便振替 01130-8-72393 まで。

「教会の生きるメモリー」
無原罪の聖母の祝日に

（十二月八日、ミサの後、教皇様はローマ市民が昔から「無原罪の御宿り」像の足元に花を捧げてきたスペイン広場へおもむき、大きなバラの花束を捧げられ、その場でお告げの祈りを唱え、お話をされた。）

★　みことばが人となられた。私たちは今、聖母像のもとに集まっています。無原罪の処女のみ前にいます。柱の上にそびえるこの御像は、聖母の高い地位を語っているかのようです。生涯を通じて従順、謙遜であった聖母は、ナザレトでのお告げの言葉に従ったおかげで、何とすばらしく高められたことでしょうか。

みことばが聖霊によって人となられた時、マリアはみことばの御母となりました。

御子は、御母を何とすばらしく高められたことでしょう。全ての人が、託身によって何とすばらしく高められたことでしょう！

人となったみことばの御母、人類のための、この高貴な尊厳の御母よ。

★　これこそまことに偉大な神のわざです。処女マリアは神のこの驚くべきみわざの中心にいる自分に気づきます。

そして、神の驚くべきみわざは、マリアの心に最初のすみかを見出すのです。

聖母は神のわざの生きた記念、教会の記憶です。日々、私たち皆に神のわざを伝え、その驚くべきみわざを忘れぬようにと告げています。

一九六五年十二月八日、私たちは四年間にわたる第二バチカン公会議の成果を聖母の手に委ねました。今日、私たちは公会議後の全教会のためのカテキズムを聖母の手に委ねます。神の驚くべきわざを決して忘れないために。

御身は変わらぬ思い出。教会の御母よ、課題を負う私たちをお支えください。司牧者、男女を問わず要理教育者、両親、教師を支えてください。

教会の記念に仕えるべく召された人々をお支えください。教会の使命は彼らを通じて成就するのですから。そうして彼らは移りゆく流れの中で神の真理の柱となるでしょう。流れの中では人々が迷い、時には誤りながらも真理を捜し続けています。真理こそ人間の召命、地上の旅路の目的地なのです。

★　御身は人の心が抱く全ての汚れなき感覚そのもの―全てよいもの、美しいものは神のもの、全ては神から出て、神に帰ります。

聖霊の花嫁、神の深みを見通す方、紀元二〇〇一年目への敷居をまたごうとする私たちと共にいてください。

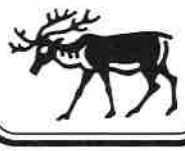
この世の霊が川床を狭め、生きる水、生命を与える水を探すのが難しく、心がくじけてしまう時、私たちと共にいてください。

神の御子の無原罪の御母よ、御身は私たち人類の母でもあらせられます。御子は人類の召し出しの完成と、その大いなる尊厳を示してくださいました。

御母のような感受性を私たちにも植えつけてください。驚くべき神のみわざへの生き生きした感覚を保ち、御父から与えられた偉大さをなくすことがありませんように。

今日、ローマ全市と教会は無原罪の聖母に感謝し、この広場で、聖母のもとに集えたことをうれしく思います。（九二・十二・八）

愛する召し出し
（聖家族の祝日に）



●　本日の典礼は、イエズス、マリア、ヨセフから成る聖家族に目を向けよと呼びかけます。それは、人となった神の御子がおられる特別な一家ではありましたが、まさにその理由で世界中のあらゆる家庭が確かな理想と活力の秘密を見い出すことのできる、模範家庭となっています。

クリスマスと聖家族の祝日がこんなに近いのは偶然ではありません。実際、聖家族はクリスマスの自然な帰結なのです。なぜなら、何よりもまず神の子御自身が、他の子供と同じように家庭のぬくもりをお選びになったからです。

さらに言えば、人類を救うにあたり、個人的なことや社会的なことも含めて人間のあらゆる局面を身に帯びようとされたのも事実です。世の贖い主は、こうして家庭の贖い主でもあります。マリアとヨセフと共に生活することで、主は家庭を神の本来の輝かしい計画へと復帰なさいました。

●　兄弟姉妹の皆さん、ナザレトの聖家族をお手本にして、核家族の持つ根本的な価値を見直そうではありませんか。

家庭とは愛の召命、特別な交わりを体験するように招かれている共同体（使徒的勧告『家庭』21番参照）です。神が教会と世界のために立てられた限りない一致、その模範と源を三位一体の交わりに求めることができる一致の計画が、家庭という共同体の内にあります。

不幸にも今日の家庭は、結婚の不解消性を軽んじて生命を受け入れない、快楽中心で相対主義的な文化によって傷ついています。いつも犠牲になるのは子供たちですが、悪影響は社会全体に及び、挫折感や緊張、攻撃心、逃避願望、そして時には暴力を引き起します。

複雑化する社会で、家庭の価値と召命を再発見することなくして、どうして秩序ある平和共存が保障できましょう？

●　本日の祝日は私たちにこの緊急課題を示し、聖家族という理想を掲げてくれます。十字架抜きの聖家族はあり得ませんが、それは祈りの家であり、深く清い愛情で結ばれ、神の御旨を心静かに受け入れることで日々の困難は軽くなり、愛は家族内だけにとどまらずさらに広く、具体的・普遍的な連帯性にまで広がっていきました。

祝福された処女マリア、お告げの祈りの時にあたり、お願い致します。全世界のキリスト信者の家庭のために、常に福音の理想を求め、新しい人類のパン種となる恵みをお取り次ぎください。

（十二・二七）

★福者ホセマリア・エスクリバーの著作★　霊的読書、念祷の糧として……

●35ヶ国語に訳された現代の『キリストにならいて』「道」（第10版）…定価一六〇〇円　●人間的完成への広い展望を提供する「拓（ひらく）」…定価一六四八円

●聖性と使徒職を目指す人のために「鍛（きたえる）」…定価一六〇〇円　各〒三〇〇円　お申し込みは精道教育促進協会まで。

説教・講話・書簡等の抄訳

教皇様との一問一答（続き）

（前号に引き続き、教皇様とミラノの新聞のインタビューをお伝えします。）

――カトリック教会とギリシャ正教会の話し合いは進んでいますか？「気高きギリシャ正教会」と呼びかけて、手を差し出されましたが？

「バルト諸国訪問に同行されたモスクワの総大主教の代表は、自分たちがまず最初に共産主義によって莫大な被害を被ったことを知ってほしいと言われました。それは本当です。カトリックもずいぶん苦しみましたが、人口に占める数はごく少数です。ソビエトにおける激しい宗教迫害によって、ロシア正教会は大きな害を受け、信者を呼び戻す道を見つけなければならなくなりました。今では全てが変わりました。昔、ロシアはギリシャ正教会の国でした。ロシアの国のアイデンティティは正教会を土台にして築かれたのです。ロシアの歴史はギリシャ正教会からスラブ教会、ロシア正教会へと堅く結び付いています。そのロシア正教会との間には、キリスト教一致の話し合いの原則にのっとって、解決すべき問題がいくつかあります。ここでは二つを挙げたいと思います。第一に、旧ソビエト領におけるラテン教区設置、つまり以前存在し、後に共産主義体制のため活動を停止させられた教区の問題です。ラテン典礼様式のカトリック信者たちは、その地で何十年もの間、司教のいない状態でした。これはまことに不当なことで、今や正されなければなりません。第二に、ギリシャのカトリック教会の問題です。共産主義体制によって激しい迫害を受けましたが、使徒座への忠実を保ち続けました。長い間の潜伏の後、今再び教会を築き始めています。」

「こうした問題はいずれも教会一致のための話し合いを通して愛と真理のうちに解決できるでしょうし、そうしなければならないと確信しています。」

――ポーランド人であることが教皇であることに影響を与えたでしょうか？

「私はポーランドで育ちましたので、ポーランドの歴史、文化、経験、言葉すべてが私の中にあります。今でも、ものを書くときはポーランド語で書きます。母国語が他の言葉に変わることはありません。自由のため懸命に戦わなければならない国、隣国からの侵略と影響を受けざるを得ない国にいたため、第三世界の国々のこと、別種の従属関係、特に経済的従属関係のことなどを深く理解することができます。これについてアフリカの指導者と何度も話しました。搾取のための開発が何であるかを知っているので、私はすぐさま、貧しい人、権利を奪われる人、無防備な人々の側に立とうと思うのです。」

「世界の権力者たちがいつもこのような教皇の考えを理解するとは限りません。時には道徳規範に関する問題に腹を立てることすらあります。中絶、避妊、離婚などの問題に関して拘束されるのを好みません。しかし教皇はそれに自由を与えることはできません。神から委ねられた仕事は人間とその尊厳、基本的権利、何よりも生命の権利を守ることなのですから。」

内に向いたヨーロッパ

――人々はヨーロッパがこれからどのようになるのか、ある種の懸念を抱いていますが、勇気づけていただけませんか？

「ある政治家がとても印象的なことを語ってくれました。ベルリンの壁の崩壊は、特に私たち、西側のヨーロッパにとって問題である。なぜなら、今までその壁が私たちを守っていたので、邪魔されることなく平和に暮らし、働き、豊かになることができた。しかし今は東ヨーロッパ全体に目をやり、そこで起こっていることに関心を持たなければならない。さもないと、自分たちが崩壊することになるだろうと。これはとても興味深い観察です。しかもそれは、バルカン戦争の結果によっても確証されました。内側に向いているヨーロッパ共同体はあまりにも無関心で、問題解決の助けにはなりません。罪もない人々の苦しみを放置しています。平和を呼びかける教皇と聖座の心からの訴えは、まるで荒野で叫ぶ声のようです。」

――教皇様が望まれる大きなヨーロッパを築くために、東ヨーロッパはどのような形での貢献ができるでしょうか？

「何よりもまず第一に、それぞれの国がアイデンティティを築くことによって貢献できると思います。それぞれの国が、共産主義体制によって強いられた変化にも拘わらず、独自のアイデンティティを保つ努力をしてきました。自己防衛本能のおかげでかえって強まったかもしれません。ポーランドも他の東ヨーロッパの国々も同様です。アイデンティティの現れ方や程度は様々であり、その舞台もいろいろでしたが、事実上それぞれの国でプロレタリアの国際共産主義と、あらゆる手段で抑圧されていた国民のアイデンティティの間で戦いが起こりました。労働者には故郷がない、彼らの故郷は労働者階級であると言われましたが、結局、このような階級思想も階級闘争も独裁も、国民の意識を押さえ込み、宗教的良心と人間の宗教心を無力にすることはできませんでした。国民のアイデンティティも宗教のアイデンティティも損なわれなかった、と言うよりある意味で、以前よりも強くなったと言えるでしょう。」

――発展を遂げたが、経済の面への関心が強すぎる西側。他方、苦しみからまだ立ち直っていないかつての共産主義のヨーロッパ。この二つのヨーロッパが再び一つになる時どちらが多くを得るでしょうか？

「どちらが多く失うかを考えてみてください。東側ヨーロッパは多くを失ったにも拘わらず、アイデンティティに関しては、全体主義体制の経験を通してずいぶん成長しました…。」

――それは共産主義のおかげですね？

「自己防衛と、マルクス全体主義体制との戦いの過程で成長しました。東側では、人間のもう一つの大切な面が保たれました。これを、十五年前にポーランドから一人の教皇が選ばれた理由の一つとして見ることもできます。東側ではいくつかの価値が西側ほどには損なわれなかったのです。無神論の立場を取る体制のもとで生活したため、ポーランドのような国においても、宗教の意味を人々はより明確に理解することができます。西側でははっきりしていると限らないこと、つまり、神が人間の尊厳の源であること、究極の絶対的な源であることを悟りました。東側の人々、収容所列島の囚

不変の教え

人たち、そしてソルジェニーツィンが理解しました。西側ではそれほど明確に認識していません。ある点まではわかっていますが、それを宗教から切り離しています。宗教を遠ざけるべきものとして考えることもまれではありません。」

忘れ去られがちな価値を守ろう

――教皇様はしばしば、モネ、アデナウアー、シューマン、デ・ガスペリといったヨーロッパを築いた偉大な人物について語っておられますが、教皇様を除いて、現在はそのようなすぐれた指導者はいないように思われます。これについて説明していただけるでしょうか？

「どのように説明すればよいかわかりませんが、それはビジョンの問題だと思います。現代の政治家は自分のビジョンを低くし過ぎました。ところが基礎を築いた人たちのビジョンは気高く、広大で、総合的でした。ソビエトとの対立が大きな動機です。経済的、政治的一体性にとどまらず、文化的、精神的にも一体性を求めていたのです。今日、全てが経済の面に限られているような印象を受けます。この点で、大きな課題と挑戦が教会と教皇と司教を待っています。しばしば忘れられがちな大切な面や価値を守り、促進させる仕事です。この重大なメッセージに全ての人が耳を傾けてくれているとは限りません。聞く人があっても、皆が真剣に受けとめるとは限らないのです。」

――教皇様は一千年代から二千年代へと人類を導く教皇であられると思います。二千年代に移る日を前に、人類の未来に関して多くの疑問が起っていますが、その日をどのようにお考えでしょうか？

「キリスト教会は世の終りについて独自のビジョン、明白な終末論を持っています。それによると、千年代から二千年代に移る日も他の日と同じ日です。しかし、別の意味でこの日はとても大切です。二千年前にキリストがお生まれになり、二千年の間、教会、使徒たちや宣教師を通して人間の歴史に現存し、お働きになりました。この二千年が終るとき、私たちは良心の糾明をしなければなりません。生き方、キリストとの接し方、福音からそれていないか、などについて。間違いなく、深い内省が要求されています。」

――デンバーで、福音は個人の内に閉じ込めておくべきものではないと言われましたが、カトリック信者はある意味で地域社会において政治的影響力を持つべきだということでしょうか？

「キリスト信者は当然、市民として政治的に行動できますし、またそのようにすべきです。信仰や信念を社会に示すためにも行動しなければなりません。どうして取り残されなければならないのでしょうか？　確かに、キリスト教精神を私的な分野に制限しようとする傾向はあります。それはキリスト信者を黙らせたいからです。福音は決して『逆らいのしるし』となることをやめません。」

――トリノの社会週間に際して送られたメッセージで国の一致の意識を強めるよう要望されましたが、多くの人がそれを地域同盟への批判と受けとめました。そうでしょうか？

「私は、話をするとき一面的にならないように、いずれかの肩を持たないように気をつけています。私の話はあくまで原則にとどまります。それが教会の使命でもあるからです。その原則を現実の生活に浸透させること、家庭に、仕事の場に、経済と政治の場に取り入れることが、公の場で働く信徒の仕事です。」

――パウロ六世は重大な決定を一人で下さなければならない「教皇の孤独」を日記に記しておられます。教皇様は孤独で苦しまれたような印象を受けませんが、孤独を感じられたことはあるでしょうか？

「それは一度もありません。おそらく気質の違いでしょう。私の回りには親しい友人がいます。一人で決定を下しません。司教や聖座の人々と共に働いています。司教方がローマへ定期訪問に来られた時はいつでも会うようにしていますし、一緒にミサをたてます。昼食に招き、いろいろな話をします。互いの経験を話し、討議できるとても貴重な時間です。これは第二バチカン公会議で想起された連帯性のおかげです。」

――教皇様は日記をつけておられますか？

「いいえ、他にやるべきこと、考えるべきことがたくさんありますので……。」（九三・十一）

暴力に打ち勝つ聖ステファノ

皆さん、本日は最初の殉教者、聖ステファノの記念日です。

使徒行録には彼の最期のもようが描かれています。襲撃され、無惨にも死に渡されましたが、天が開けるのを目のあたりにして（使徒7・54～60参照）自分を殺す者たちを赦したのです。

喜ばしいクリスマスの雰囲気に対し、こんな記念日は場違いに見えることでしょう。クリスマスは生命の祭典ではありませんか？　安らぎと平和をかもし出すものではありませんか？　この夢のような雰囲気を、暴力的な犯罪の思い出でかき乱そうとするのでしょうか？

実際、信仰の目から見れば、本日の記念はクリスマスの深い意味とぴったり合っているのです。ステファノの殉教においては愛が暴力に打ち勝っています。殉教という犠牲を払いながら、教会は彼らが「天の国に生れる」のを見届けてきました。それで今日、私たちはまるでキリストの降誕から咲き出たかのようなステファノの「誕生」を祝うのです。

とは言え、このような「血による誕生」は実に波乱に満ちています。ステファノの殉教において善と悪、敵意と赦し、柔和と暴力が真っ向から対立する様子は、キリストの十字架の場合と異なりません。従って最初の殉教者の記念は、クリスマスの根底にある厳しさを私たちに教えてくれるのです。それはベトレヘムとカルワリオをつなぎ、神の救いを受けるためには罪との戦いが不可欠であること、十字架の秘義を通らずにはいられないことを思い出させてくれます。

これこそが、イエズスが弟子たちに示した生命の掟です。「私の後に従おうと思うなら、自分を捨て自らの十字架を背負って私に従え。」（マルコ8・34）

祝された処女よ、クリスマスが寛大な信仰の行為と、聖ステファノと全教会の殉教者たちのような輝かしい改心・証の時となる恵みをお与えください。（十二・二六）

「教皇様の声」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月十日発行　■定価　一部八十円　送料実費　■一年予約九百円　送料七百円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
01130-
8-72393